

2015年5月22日フィレンツェ市ヴェルディ劇場にて上演



京都市とフィレンツェ市の姉妹都市

提携50周年を迎える今年2015年は、フィレンツェにとって、2つの重要な祝い事が続く年だ。ダンテ・アリギエーリ生誕750周年、そしてフィレンツェがイタリア共和国の首都となってから150周年を迎える年でもある。

この重要な祝典に、京都の桧垣バレエ団が参加、アレクサンドル・デュマ・フィスの同名小説およびヴェルディのラ・トラヴィアータを基にした、小西裕紀子による演出、振付、著名なヴェルディのアリアは小室弥須彦の編曲による *La Signora delle Camelie* (椿姫) をフィレンツェのヴェルディ劇場で上演する運びとなったのだ。

本公演は、この日本のバレエ団を初めて知る機会となった。当バレエ団は、パリ・オペラ座バレエ団のバレエダンサー、シジル・アタナソフの共演で、1986年に旗揚げ公演をする。シジル・アタナソフは、祖国において様々な褒賞を受け、国際的に活躍したバレエダンサーである。そのレパートリーは、ジゼル、白鳥の湖、シンデレラなどの古典から、日本のオリジナル作品である *Taiko* や *Mitsuko* までと幅広い。



このフィレンツェデビューで検垣バ

レエ団が披露した *La Signora delle Camelie* (椿姫) は、同バレエ団の芸術監督でもある検垣美世子デザイン、チャコット株式会社製作による豪華な衣装と、宮原直美の旋律的なデジタル映像を駆使したもので、映像は、父親デュバル(セルゲイ・サボチェンコ)の反対に合うマルグリット(プリマ・バレリーナ小西裕紀子)と、アルマン(佐々木大)の純愛を際立たせるロマンチックな雰囲気を作り上げていた。

デュマ・フィスの原作とヴェルディのオペラの主要な事象や場面を押さえながら、不幸な恋人たちの悲しくも情熱的な愛の物語の主要場面を回想する、2幕4場構成の作品である。

舞台は小説と同様に、すでに債権者が家財を持ち去った後のマルグリットの部屋で、亡くなった彼女が残した日記を読むアルマンの回想で始まり、哀れで孤独な女の最後と若者の深い絶望を描き、初めのシーンに繋がる形で終わる。



2010年に制作されたこの作品の中

心的な場面は、マルグリットの屋敷の大広間での群舞シーン、彼女が肺結核の発作を起こし部屋で二人だけになるシーン、アルマンの父親がやってくるまでの田舎の避暑地での幸せな日々、恥辱的な娼婦の生活に戻るマル

グリットの選択などで、これらの一連の場面は、ラ・トラヴィアータを彷彿とさせる。そして何より、男爵の屋敷でのパーティーで、アルマンが嫉妬に駆られて札束を娼婦になげつけ侮辱する場面は、ヴェルディのオペラそのものである。

文学的および音楽的伝統をしっかりと受け継いだこの「切れ長の目(訳注:日本人を指す表現)による」*Signora delle Camelie* は、1963年のマクミラン版や1978年のノンマイヤー版などの著名な振付家による振付の影響を受けているが、そのセンスと趣向はまさに東洋の「椿姫」である。マルグリットが死の床で見る白い仮面を被った死神達の場面は、能舞台を思わせ、異国情緒に引き込まれた。



ネオ・クラシックの様式と表現が特徴的な、マルグリットとアルマンそしてマルグリットと父親のパ・ド・ドウは、美しく情熱的である。小西裕紀子は、その役の前半の軽薄さと結末の悲劇性を巧みな変化で優雅に表現している。佐々木大は情熱的なアルマンを演じ、その見事なバロンも含め、技術力の大変高いバレエダンサーであることは疑いの余地がない。

セルゲイ・サボチェンコは、舞台上でのカリスマ的な存在感と、練磨されたレベルの高い優美さが印象的である。そのレベルの高さは、桧垣バレエ団のダンサー達にも同様に見られ、質の高い男性ダンサーたちには、その正確で丁寧なステップやジャンプに感銘を受けた。

この公演は一見の価値があり、かつ高い評価に値する作品である。主演達が、ロマンチズムの象徴的な世界観を見事に表現することに成功しており、真実性と説得力があることが特に評価される点である。公演後の大勢の観客の熱烈な拍手は、この日本のバレエ団の特別公演と、「切れ長の目」演ずる魅力的な *Signora delle Camelie*(椿姫)の成功を意味するものである。

ガブリエラ・ゴツリ フィレンツェ

Gabriela Gori Firenze Teatrionline

写真: アンドレア・グランドーニ Andrea Grandoni